俺たち、ベーコンレタス部！

10Time

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺たち、ベーコンレタス部！

【Ｎコード】
Ｎ９３４３Ｚ

【作者名】
１０Ｔｉｍｅ

【あらすじ】
とある田舎町の高校に、新しくできた部がある。部員数は、５名――。部に入るには、ある性質を持っていなくてはならない。この５名は、その、ある共通の性質を持っている。そんな部の日常的物語が今、スタートする。

1．プロローグは、俺に任せろ！

とある田舎町にある高等学校。
――黄峰高校（おうほうこうこう）。
そこに、帰宅部だった者同士で創られた新しい部がある。　メンバーは、ある性質を持っており、その性質を持っている者しか入部できないことになっている。　しかし、その性質を持っているからといって加入しようとする人は、まずいない。
なぜかって？
それはこのあとに出てくるこの部活の名前を知ればわかるさ。
ま、それは置いといて。
二階のプレート看板のない小部屋。　ずっと使われていなかったその空き室に三人の生徒が集っている。

「はぁー」
「物語の始まりはその溜息から始まった」
溜息を吐いた男はデスクにうつ伏せになると、そばにいた男がそう口にした。
「なに、言ってんの？」
「この可愛い顔の裏にあるツンツンとした態度をとる男の名前は、池貝爽太（いけがいそうた）。彼はこの部のキャプテンともいえる存在である。年齢十六歳。身長百六十三センチ。A型。趣味は音楽鑑賞、テニス、人間観察。特技はその可愛い顔を使って色々な男を落とす」
「んなワケあるかっ！」
自分の特技に納得のできなかった爽太は、目の前にあるデスクを思い切り叩く。
「まぁまぁ落ち着けって」
そんな二人のやり取りをそばでニヤつきながら見ている男がいる。
そう、

「彼の名は、布野瑞輝（ふのみずき）。年齢十六歳。身長百六十八センチ。A型。趣味は二次元一筋らしい。特技は妄想。俺たちと同じ部の仲間である。彼曰く、自称腐男子だそうだ」
腐男子（ふだんし）って――？
そうだなぁ……。　分からない奴はウィ〇ペディアというサイトを参照してくれ！
「そしてこの俺。クールで超イケメンなこの俺の名は！」

その時、部屋のドアが開いた。

入ってきたのはショートの黒髪で高身長な男。　たれ目をしているが、その人気は芸能人をも超える。
「三人とも早いな」
「ってお前！　空気嫁このKY（ケーワイ）ッ！」
部屋に入るなり突然KYと怒鳴られて男にはワケが分からないようだ。　しかし、男は普段通りにスクールバッグをデスクに置いて爽太の隣席に腰を掛け、本を読み始める。
「まぁこういうのは仕方ないよな。よくある展開だ。さぁ気を取り直して、」
ナレーターの男が再開しようとしたとき、バタバタと大きな足音を立てながら、女子生徒が部屋へ駆けてきた。
急いでいたからか、その呼吸は大きく乱れている。
「ね、ねぇ……。やば、やばいニュース……。ビッグニュースよ」
「この女。腐女子（ふじょし）である」
「腐女子じゃなくて、藤吉（ふじよし）よ！　聞いて、E組の沖田君と安達君が付き合ってるんだって！」
女が興奮しながら話す中、爽太はツンとした口調で口を開く。
「知ってる」
「同じく」
爽太の隣りに座っている男も同意する。

「ナノハちゃん遅いねぇ。僕の方が情報早かったみたい。フフフ」
瑞輝は自分と同類の女に勝ったことに、喜びの気持ちを抑えきれなかったようだ。
すると、女は細くした目でナレーターの男に顔を向ける。
「それじゃあ、あんたも？」
「当たり前だろ。俺E組だし」
女はそれを聞くと、床に膝をついた。
「なんなのよ、もぉ～」
「この女の名前は、藤吉奈乃葉（ふじよしなのは）。趣味、特技は瑞輝と殆ど同じ。違うっていうと性別くらい？　なんにせよ、奈乃葉もこの部の一員である」
「なに言ってんのよ？」
「少し順番が変わったが、この爽太の隣りに座っている男の名前は、枇榔葵（びろうあおい）。年齢十七歳。身長百八十四センチ。趣味はサッカー。特技もサッカー？　ルックスが良すぎて他校の話題にもなり、ファンクラブもできる程のクールボーイだ」
「だからなに言ってんのって言ってんでしょ！」
「そして最後にこの俺！　超」
「超イケメンでもクールでもない見た目ギャル系男子、加賀山虎（かがやまたいが）。十六歳。身長百七十七センチ、B型。趣味は男観察、男をナンパする、自分が男好きだと堂々と公表すること。特技、男から振られる」
「って、爽太！　なに勝手に俺のナレーションすんだよ！」
「語り手が自分の説明するのもどうかなぁと思ってさ。本当のこと言ってみた」
「俺どんだけ酷ェ言われようだ……」
そんなこんなで俺たち部員五人の説明が終了した。
帰宅部で創られたこの部の部員は、全員が二年生である。活動内容は未だに決まっていない。つい一週間前にできたばかりだからだ。
なぜ決まってないのに部が出来たのかって？　良い質問だ。
簡単に説明すると、この部活はまだ正式に部として認められてい

ない。途中段階にいるのだ。
それじゃあこの一週間、なにしてたって？　それはこれからわかることさ。
あー、スイマセン。なんか、説明が面倒になってきたからそろそろ次いってもいいっスか？　プロローグってもなに説明すればいいのか分からないんだわぁ。俺、成績オール２ですから。
そんなこと誰も聞いてない？　さっさと次いけ？
ははーん。そんなこと言われちゃ俺も長話したくなっちゃうよ。てへっ。
「さっさと終わらせろ！」
「爽太は、虎の頭を思い切り叩いた」
二年生の帰宅部で創られたこの部の名前は、ベーコンレタス部。略して【ＢＬ部】
だからなのか、入部希望する人がいない。そもそも活動内容がまだ決まっていなかった。
そしてこれから、この部活で起こるさまざまな物語が始まろうとしていた――。

2．プロローグの反省

「瑞輝が担当した方が分かりやすかったと思う」
デスクに頬杖をついている爽太がそう口にした。
「そう？　僕でも二人が登場してきたら詰んでいたと思うよ」
彼らは今、部活の説明の反省をしている。瑞輝の言う二人とは、途中から部屋に入ってきた葵と奈乃葉のことだ。
「そうだぜ爽太。俺だってあのとき枇榔に邪魔されなかったらちゃんと説明できてたさ！」
「葵は仕方ないじゃん。てか最後のやる気の無さは一体何なんだよ？　それに、登場人物を一気に説明しちゃって、絶対名前覚られてないよ」
「仕方ねぇだろ。こう一気にキャラが全員登場されちゃさあ」
「しかもセリフが多くてト書きが少ないし」
「だから仕方ない……、てかト書きなくても伝わるっしょ！」
「それじゃあ読者が減るから」
「だったらいっそのことノベルゲームにすっか？！」
「こんな題名の時点で買う人物は決まってるからな。売れるわけがない」
「ちょっとあんたたち、なに勝手に話し進めてんのよ！」
二人で話を進めていることに気が乗らない奈乃葉が口を出す。
「お、やっと説明来たな」
「はあ？　ねぇ、さっきから気になってたんだけど、あんたたち一体なんの話してんの？」
「なんのって……。なんの話してるんだ？」
「俺に訊かれたって……。つか、これじゃあ俺かお前どっちが話してるのか分からないだろ？」

「お前は爽太だろ？」
「そうだが、いちいちそう言うのも面倒だろ」
「じゃあセリフの上に頭文字をつけるべ！」

ソ「こう、か？」
タ「そうそう。これだとわかりやすいだろ！？」
「だから、何の話をしてるのかって聞いてんの！」
奈乃葉は怒った口調で言う。
タ「ＫＹだな」
ソ「ああ、ＫＹだ」

プチンッ。
そのとき、何かの切れる音が聞こえた。

「人の話を聞けええぇぇぇぇ！！！！」

ソ＆タ「ぐふはぁッ！！」

☆　☆　☆

「てなことで語り手はこの僕、瑞輝がすることになりました」
「そんなことはいいから早く反省しようぜぇ？」
先程関係のない話をしていた虎が調子に乗ってそう口にする。
「えーと、まずはどこから話せばいいのだろう」
瑞輝は困った様子で、爽太の顔を見つめる。いや、爽太だけを見ていたわけではなく、爽太とその隣に座っている葵を一緒に見てい

た。
（フフフ。この二人がやっぱり一番ＣＰに向いてるよ）
そんな様子の瑞輝に爽太が口を開ける。
「まず俺が駄目だと思ったのが、キャラの説明。年齢、身長は良いとして、趣味と特技なんていらない。それに血液型も。そんなものこれから役に立つかも分からんしな」
「ふむふむ。でもそれがなきゃ説明不足にならない？」
「容姿の説明を入れればいいんだよ。例えば、爽太の髪型は甘く、滑らかでツヤのある黒いショートヘアをしている。顔は子猫のように可愛いが、その裏にツン……」
爽太は何かを言いかけた途端に、「ゴホンッ」と咳払いをして話をやめた。　多分、虎の説明につられたのだろう。
「まぁつまり、これから先で必要になるものだけを説明すりゃいいんだよ」
「はーい」
爽太の右隣に座っている虎が手を上げる。
「容姿なんて挿絵で十分だと思いまーす。もしくは表紙とか」
「うん。その方が説明は省けるね。あとは性格などで十分だし。どう？　爽太くんわ」
「いや、普通に無理でしょ。誰が挿絵なんて描くの？　つかそんな余裕なんてないからね？　セリフ考えるのにどれだけ時間掛かってると思ってるの？」
瑞輝は何のことか分からないことを言われて茫然とする。虎も同じだ。　すると、爽太は失敗したという表情を浮かべて話を逸らす。
「と、とにかく挿絵は無理だ！」
「え～。いい案だと思ったのになぁ……」
「それじゃあ次。僕が一番気になったのは、腐男子の説明を省いたところかな」
「ああ、それは俺も思った」
瑞輝の意見に爽太も同意する。

隣りで聞いてる虎は、なぜだ！という表情を浮かべていた。
「腐男子。簡単に説明すると、男の人が、二次元世界の男×男のＬＯＶＥシーンを好む人のことを言うんだよ」
「つまり、虎と同じでいわゆるホ〇っていうこと？」
「おま、人のこと言えねぇだろ！」
二人の会話に虎が割り込む。
「ううん。中にはそういう人もいるけど、付き合うなら女性とじゃないと駄目って人もいるよ」
「つか俺がそれを省いた理由わな、大人の事情が多発すると思って、敢えて俺たち未成年者を気遣ったわけだ」
虎は腕を組み始め、自分の話に納得するように頷く。それを無視するように爽太は周囲を見回して口を開く。
「ところで奈乃葉はどこ行ったんだ？」
「さっき怒って飛び出していったよ」
「なんか悪いことしたな」
「まぁ男だけにしか分からないことだよね」
「いや、多分男でも一部の人にしか分からないと思う」

「……」
会話がなくなり、辺りは沈黙に包まれる。
これは、一番あってはならないパターンではないのか？
しかし瑞輝は、爽太と葵の二人を見つめる。
（やっぱ、この二人ヤバス。ツンキャラにクールイケメンて最高すぎっしょ！　もう鼻血が出そう……）
「どうかした？」
気になった爽太がそう口にする。
「え？　い、いや。なんでもないよ。なんでもないからね！　ちょ、ちょっと僕トイレ行ってくる！」
すると瑞輝は鼻を押さえながら駆け足で部屋を出て行った。
「俺もちょい用足してくるわ」

そばにいた虎も部屋を後にした。
「それじゃあこの間の語り手は俺……？」

「……」
辺りが沈黙と化す。
二人だけとなった部屋。爽太は今ものすごく緊張しています。心臓の鼓動が抑えられませんっ！
そう。隣りに枇榔葵というモデルにも負けないくらいのイケメンがいるからです！
「あ、葵はどう思ってんの……？」
緊張している中、爽太は枇榔葵に声を掛けましたっ！
「ん？　なにが？」
葵は読んでいた本を閉じ、甘く優しい声で爽太に訊く。
バクバクバクバク。
その声を聞いただけで、爽太の脈が上がり始めた。
「あ、いやその……。虎の……せ、説明？！」
「んー。俺途中から入ってきたからなー。ただ、爽太が言った加賀山の説明は面白かったかな」
葵はそう口にすると、爽太の方に顔を向けて、笑みを浮かべる。
爽太はすぐに顔を逸らし、別の話題へ切り替えた。
「あ、てか、俺たちの部活名がベーコンレタス部って何なんだろうね。ははっ」
（なに言ってるんだオレェェ！　しっかりしろっ！）
「いいんじゃないか？　俺は気に入ってるかな。部名」
枇榔葵が気に入ってる部名。ベーコンレタス部――。
その由来は、瑞輝が考えたもので、ベーコンレタスバーガーという腐の者にしか分からない用語があるらしい。よく街角で見かけるマク〇ナルドの品物ではないという。
ベーコンレタスバーガー。ベーコンレタスB。ベーコンレタス部となったわけだ。うん、適当だ。そしてもっとも重要なところ。略

してＢＬ部ということだ。
ＢＬ。つまり、ボーイズラブ。この部活はボーイズラブ部ということだ。話の初めで虎の説明した”性質”というのは、つまりそういうこと。

今ならまだ間に合うと思うから言うけど、そういうのが苦手な人は曲がれ右してくれ！

「あっ」
突然、葵がそう口にして爽太は吃驚する。
「そういえば最後の”この部活で起こるさまざまな物語が”ってのが気になったな」
「え？　あぁ。そういえばそう語ってたね。何なんだろう……」
爽太は葵の言った言葉の意味を考える。
ま、虎が戻ってきたら本人に直接聞けばいいか。
こうして俺たちの反省会は終わり、新たなストーリーへ進むのであった。

俺、語り手向いてないわ……。

3．第一話のタイトルを考えるべし！

「またこんなタイトル……」
始まり早々、爽太が白けた顔で言う。
「いいじゃん。なんか楽しくなりそうじゃね！？」
「どこがだよ。大体プロローグの時点でおかしいからね？　いきなりキャラが語ってるってどうなんだよ？」
「それがこのＢＬ部の特徴だろ！」
「ト書きが少ないのもか？」
「もち。いや……、それは俺の能力不足だ」
「だろうな。でも実際、説明するのって難しいよな。（一ページ前を修正したい…。）」
　爽太は、トイレから戻ってきた加賀山と対談している。これからこの物語のサブタイトルを考えようとしているらしい。俺には何のことか……。
「でも、こう座りながら話すときは、動作の説明なんていらないから楽だよな」
「その代り、ノベルゲーム的にセリフが多いけどな」
「まぁ漫画じゃないぶん、俺とお前どっちが話してるのかもわからないけどな！」
ソ「その場合、こうすればいいだろ？」
タ「だな。んで、始めに戻るが、タイトルは何にするんだ？」
ソ「俺さ、思ったんだけど、『プロローグの反省』ってところからもう一話目に突入してるよね？　だからこれは二話目じゃないのか？」
タ「ちっちっち。一話の”話”っていうのは、全体的に捉えるものであって、その中にある”章”っていうものを纏めたことを”話”

と言うんだ」
ソ「ふーん。それ、虎だけの考えであって、間違ってたら読者に嘘教えたことになるね」
タ「スイマセン。俺だけの考えなんでそう思っといてください」
加賀山は、どこか分からない方向に向かって、頭を下げ始める。

ガチャ。
部屋のドアが開き、両鼻にちり紙を詰めた布野が戻ってきた。
「ホメンネェ〜。ひょっとひんひゅうじはいはおほってはぁ〜」
ソ&タ「？」
二人にはどうやら布野が何を言っているのか分からないらしい。
ア「ごめんね。ちょっと緊急事態が起こってさ」
「ほぉー！　だはらほめん。ひょうはほく帰るね」
ア「そう。だからごめん。今日は僕帰るね」
「ほおゆうことだから。またあひた！」
布野はそう言って部屋を去って行った。
数秒、静寂したあと、加賀山が口を開く。
タ「まさか枇榔が出てくるとは思わなかった。しかも空気読めてるし……」
ソ「そりゃ、葵だもん！　さ、続きしよっ！」
爽太は笑顔でそう言う。
タ「なんかお前、キャラ変わってね？」
ソ「え？　そ、そんなわけないだろ。なに言ってんだよ…ったく」
二人は、姿勢を正して再び話を始める。
関係はないが、一応この部屋の説明をしとこうと思う。
まず、部屋の広さは十畳ほど。使われていなかった部屋だったからか、今はまだ置物が少ない。資料などを収める収納棚と、中央にオフィスデスクと会議用テーブルが置いてある。それと、五人分のパイプ椅子。

奥には窓があるが、眺めるといっても外は四角に囲まれた中庭なので町の景色は観ることができない。中庭と空の様子だけが眺められる。
今は大体こんなもの、か――。
ソ「ねぇ、葵はどんなタイトルが良いと思う？」
「えっ？」
突然、爽太に問われて驚いた。
ソ「葵なら納得のできるもの考えてくれそうだし」
爽太は笑って言う。
俺、頼られてるんだな――。
「そうだなぁ。普通に、ベーコンレタス部で良いんじゃないか？」
タ「それだと何かつまらなくねぇか？」
ソ「そうだよ！　それが良い！　一話のタイトルは、『ベーコンレタス部！』でいいね！」
タ「っておぃッ！　何かお前、枇榔と俺に対しての態度が全然違くねぇか？」
ソ「んなわけないだろ。虎がしっかり考えないからそう見えるだけだ」
タ「いや、明らかに違うぞ……。つーか、こういうのわだな？　コメディっていうものが大事なんだよ！　わかるか？」
ソ「コメディというか、ギャグだろ？　俺、そういうの苦手だから。大体、日常的なジャンルにギャグなんている？　俺は、ほのぼのとした感じの方がいいね」
タ「例えば？」
ソ「例えば……、涼宮ハルカの憂鬱とか？（アニメしか観てないが。）」
タ「んー。でもあれ、ＳＦ混じってるぞ？　もう転校生が来た時点

で日常的じゃなくなってるよな」
ソ「なんだっけ？　あ、そうそう。長門秋さ。でも、そういうキャラがいるからこそ、面白いんだよな」
タ「俺らなんて、似た者同士だからな」
ソ「いや、全然似てないと思うぞ。てか、さっきからほんと俺ら、題名に関係のない話ばかりしてる気がするんだが」
タ「まぁな。考えんのめんどくせぇし。もう、一話のタイトル、ベーコンレタス部でいいわ。うん」
ソ「じゃあ、一話のタイトルは、葵の考えたベーコンレタス部で決定だね」
　二人の意見が一致し、タイトルが決まったようだ。

ソ「あれ、ちょっと待った」
タ「どうかしたか？」
ソ「うん。あのさ、これ……、一話目のタイトル入れるところなくね？」

「……」

　どうやら既に『プロローグの反省』で埋められていて、タイトルを付け加えられないようだ。

タ「だ、大丈夫。初めて観る人にはバレはしないから密かに修正しとけばいいんだよ」
ソ「駄目だろそれ」
タ「だよな……」
　こうして二人が考えたタイトルは、虚しくゴミ箱行きとなったのだった。

というより、タイトル考えたの俺だ……。by. 葵

4．活動内容を完成させましょう

五月二十七日、午後十六時五十分――。
同好会として使われている空き室で、三人の男子生徒が談話をしている。その内の一人、池貝爽太は、右手にペンシルを持ちながら目の前に置いてある申請書を見つめて、頭を掻き始める。
「全然ッ、思いつかない！」
爽太は、”趣旨”という欄のところで手を止め、声を上げる。
「大体、趣旨ってなんだよ！？　この部に目的なんてないし、部名を見せた時点でアウトだろ。もうこの欄だけで五日も掛かってるんだぞ！？　何て書けばいいんだよっ。うがあぁぁぁぁぁ！！！！！」
「落ち着け、爽太。部名にあった内容を考えればいいんだ」
虎が優しく声を掛ける。
「その時点でアウトなんだよ！　こうなったら、部名を変更するしかないな」
「落ち着け落ち着け！　俺が良いの考えたぜ！」
すると、虎は爽太の右手からペンを取り、申請書を自分の前へ寄せて、欄に書き始める。
「これでオーケーだ」
そして、爽太は虎の書いた文字を読み始める。
「ベーコンレタス部は、ベーコンレタスバーガーのベーコンとレタスの様に主役となる部です。一緒に詰められているチーズとハンバーグには負けますけどね。　バンズは学校。チーズとハンバーグは教師。ベーコンレタスは僕ら生徒。　つまり、何が言いたいのかというと、僕らは中を支える主役となるワケです。　ＢＬ部は、この学校を支えるために創ろうと思いました。　あ、ところでＢＬＢ食べたことありますか？　おいしいですよ。ぜひ、買って食べてみてください。俺、その店で働いているので。もし、部として認めてく

れたら半額にしますぜ、会長さん」
「っな！　いい考えだろ！？」
「どこがじゃあぁ！　大体、B&Lが主役と書いておきながらC&Hに負けるなんて矛盾してんだよ！　良いこと書いているようだが、全然ッ意味わからんからな？　そして問題はその後だ。なに突然語り始めてんだよ！　マク〇ナル〇で働いてるなんて誰も聞いてないし、最後の一行、悪意丸出しなんだよッ！！」
「いいじゃねぇか。もしかしたらそれで認めてくれっかもしんねーぞ？」
「却下だ。こんなもの提出できるわけがない」
「はぁ。せっかく良い考えだと思ったのにな…。ちょっと俺、心を癒しに保健室行ってくるわ」
散々言われて落ち込んだ虎は、肩を落としながら部屋を出て行った。
爽太と葵の二人だけとなったとき、葵が口を開いた。
「ちょっと、言い過ぎだったかもしれないな」
「だってもう、申請書貰ってから五日も経つんだよ？　あとはこの欄だけなのに、こんなふざけた文書かれても……」
「うん。確かにふざけている内容だけど、俺は別にそれでも有りだと思う」
まさかの発言に、爽太は驚きの表情を隠しきれなかった。
「まだ時間は沢山あるから、ゆっくりと考えればいい。俺も一緒に考えてやるから」
葵は読んでいた本を閉じて、爽太の顔を見つめながら話す。
（俺が、いけなかったの……？）
爽太は葵の顔を見て、そう自分の心に問いかけた。
なぜ、葵は虎の書いた文を良いと思ったのだろう？
申請書をまえに、爽太は趣旨のことではなく、そのことだけを考え始めた。

午後十七時二十分――。
心が癒された虎は、二階の同好会の集まりとなっている部屋のドアを開いた。
「うおっ！？　びっくりしたぁ」
部屋のドアを開いた途端に、虎がそう口にした。なぜなら、そこに爽太が立っていたからだ。
爽太の手には、申請書と記されている白い紙がある。それを、虎の目の前に爽太は突き出した。
「あとは、顧問を決めるだけだから」
虎はその白い紙を受け取り、趣旨の欄を読み始める。
ベーコンレタス部は、この学校を支えるために創ろうと思いました。例えると、バンズは学校。その中にあるチーズとハンバーグは教師。そして、主役のベーコンとレタスは我々生徒のように。今なら会長さんだけ特別にＢＬＢを半額にしてくれるそうですよ？　ただ、このＢＬ部を認めてくれたら、らしいですけど。
「ばーか。全然変わってねぇじゃんかよ」
「うるさいな。汚い文よりは良いだろ」
爽太は照れ臭そうに言う。
「ま、仕方ねぇな。ちょっとペン貸してくれ」
そういうと、虎は爽太のペンを取り、申請書の顧問の欄に名前を書き始めた。
――周　響（しゅう　きょう）　先生。
またまた。豪い人が担当になるようだ。
「よく響先生をゲットしたな」
「簡単だったわ。あいつ宗教的なのに興味あるらしいから、俺たち男同士の関係が～って説明したらあっさりオーケーもらった」
「周響だけに、てか？」
「おっ！　座布団一枚ッ！！」
そして俺たち三人は申請書を手に、一階にある生徒会室へと向かった。

ベーコンレタス部。略してＢＬ部は、あっさりと部として認められた。だからといって、喜んではいられない。
これから、この学校を支えるために、色々考えなければならない。
そう。本当の物語は、これから始まるんだ――。
「あっ。そういえば、プロローグで虎の最後に語った”この部活で起こるさまざまな物語が”って、なんなの？」
生徒会室から戻り、爽太が虎にそう問い掛ける。
「え？　そんなこと言ってたか…？　うーん、ただの成り行きで言ったんだと思うぜ？」
どうやらそういうことらしい。
「まぁそうだとは思ってたけどね」
すると、虎は大きく腕を上げ、欠伸をする。
「ちっと部活が決まったからか安心して疲れてきちまった。悪いが今日はもう帰らせてもらうぜ」
「うん。今日はありがとね」
「なんだよいきなり。さっきとは、まるで違うな」
爽太の性格の変化に虎は笑みを浮かべる。
「んなワケないだろっ！　なに言ってんだよバーカ！」
「ははっ。どうせ成績オール２の馬鹿ですよーだ」
虎はそう言うと、そばにあったスクールバッグを肩に掛け、部屋のドアノブに手を掛けた。
「そんじゃ、また明日な。お二人さん！」
「また明日～」
二人は虎の背中を見送った。
そのあと、十分もしないうちに、二人も学校を後にした。

☆　☆　☆

「あ、あのぉ～」

「いらっしゃいませ！　何になさいますか？」
「え、えーと。加賀山くんの友達っていえば、ＢＬＢを半額にしてもらえるって聞いたんですけど……」
「申し訳ありません。当店ではそのような事は行っておりません」
「へっ？」
「お待ちのお客さま此方へどうぞ～」

5．Ｍｉｓｓｉｏｎ．１　『必要なものを入手せよ！』

今、新しく『ＢＬ部』というプレート看板を取り付けられた部室に、部員三人が集まっていた。メンバーは、池貝爽太と枇榔葵に加賀山虎。

枇榔は相変わらず本を読んでいる。他の二人は、昨日の話をしていた。

「昨日の回は、なんか良かったよなぁ」

虎は腕を組みながらそう口にする。

ソ「そうか？　読み返すと、やっぱり活動内容の意味がわからなかったわ。無理やり過ぎただろ、あれ…」

タ「まぁそこは置いといて。なんていうの？　一時的に友情が壊れたように見えたけど、あの友情が戻っていくような感じ！　最高だった！」

ソ「俺には分からないわ、そういうの。ただ、読者が減っていくようにしか見えなかったな」

タ「いいんだよそんなん。どーせ、そいつらなんて説明とか飛ばしてるやつが多いんだから。そういうやつはストーリーの良さが」

ソ「うおぉ～～～～～い！！！！！　それ以上言うと俺がお前を飛ばすぞ、おい」

タ「わりぃわりぃ。で、今回は何をするんだ？」

ソ「ったく。今日は、ＢＬ部で必要な物を探そうと思うんだ」

タ「必要な物かぁ。この部室には、前に枇榔が説明した物しかないしな。で、何が必要なんだ？」

ソ「んー。これといってこの部に必要な物なんてないんだけど、俺的にパソコンがほしいかな」

タ「パソコンねぇ。っておい。まさか…？」

ソ「はははははぁ？　す、すす涼宮ハルカのパクリぢゃねぇからな

！？」
タ「やっぱりか……」

☆　☆　☆

タ「ってなワケで、俺たちは今、コンピ研の前にいまーす」
ソ「なに実況してるんだよ」
ア「つーか、相手は先輩じゃないのか？」
タ「大丈夫だって！　どうせヲタク同士の集いの場なんだから脅せば一台や二台」
ソ「いや、脅すのは駄目だろ」
タ「ま、念のためにゲストを用意してきてっから」
　すると加賀山は、どこからか連れてきた藤吉に顔を向ける。
「誰がゲストよ！　感謝しなさいよ？　私いま忙しいのに、部員だから手伝いに来てあげてるんだからね！？（いや、ただ単に葵くんを見たかっただけなんだけどね。）」
タ「あざーっす！　ま、ここで長話になる前にさっさとパソコンを手に入れよーう」
　そういうと、加賀山は『パソコン部』のプレート看板がある部屋のドアを開いた。
　ドアが開くと最初に感じたのは、空気だった。
　なんというか、臭う――。

タ「くっせえええぇぇぇ！！！！！」
ソ「おいっ。声に出すな馬鹿！」
　どうやら爽太も感じていたらしい。
　藤吉は、頬を膨らませて息を止めていた。
　みんな同じ、か――。

タ「どーも、すみませんでしたっ！」

加賀山がドアを閉め、空気が元に戻る。
タ「な、なんというヲタク臭だ。俺、あの中で十秒も持つ気がしねぇよ」
ソ「だが、それをクリアしないとパソコンは手に入らない！」
タ「なぁ、爽太。パソコンは次回にしようぜ？　俺、まだ5回目でこれから先、出番なくなるのは嫌だよ……」
加賀山は、潤んだ声で言う。
一応説明しておくと、臭いといっても鼻に感じるものではなく、目で感じた空気である。テンションの高い加賀山にとっては、居づらい場所のようだ。
ソ「死ぬわけじゃないんだからさぁ。じゃあ俺が行ってくるよ」
ア「俺も行く。爽太一人だと危ないしな」
「危ないって、もしかして木井健先輩のこと？」
どうやら藤吉は知っているようだ。
ソ「きいけん…？」
「木井健先輩よ。噂でしか聞いたことがないんだけど、その先輩、ちょっとヤバいらしいわよ？　木井健だけに、危険ってね」

「……」
タ「ソノ時、空気ガ沈ダノデアッタ」
「なによ！　せっかく面白いこと言ってあげたのに」
タ「ちょっとタイミングが悪かったな」
「もう、一生そういうの口にしてあげないんだから！　さっさと入るわよっ！」
藤吉は怒った状態で一人、パソコン部へと入っていった。
タ「それじゃあお二人さん。頑張ってくれ！」
少し遅れて爽太と俺も、パソコン部の部屋へ入室した。

重苦しい空気。カタカタとキーボードを打つ音が耳に響く。部屋の広さは、ＢＬ部と同じくらいで、パソコンの数は九台ある。その内の二台は使われていないのか、部屋の隅に置かれていた。
部屋の中央にある七台は、全て使われている。
先に入っていった藤吉は、奥に座っている、他の部員とは違う雰囲気の男と話をしていた。

「だから、パソコン一台わけなさいって言ってんの！」
「え～、でも僕、そんな権利持ってないしぃ。てか、サユリちゅん萌え～。サユリ～～～～～ン」
座っている椅子よりも幅の広い、眼鏡を掛けている男は、藤吉に目もくれずに目の前にあるパソコンの画面を眺めながらそう口にする。
ヲタクという言葉の似合うこの男こそが、木井健だ。
「サユリサユリ気持ち悪いのよ！　さっさとパソコンをよこしなさいっ！」
「サユリンを馬鹿にするなよ！　サユリンはお前より細くて、可愛くて、優しいんだぞ！　背が小さくて、サラサラのロングヘアに、可愛らしい声。不細工なお前より、明らかにサユリンの方が勝ってる！」
「なっ！！　よ、よくもそこまで言ってくれたわね……。ムキイイイィィィィ！！！！　そんなロボットのようにしか動かない女なんか私が壊してあげるわよッ！！」
「や、やめろぉッ！」
ア「藤吉。ちょっと落ち着こう」
「はあ？　って、葵くん！？（やだ、わたし変なところ葵くんに見られてた…。恥ずかしいッ！）」
藤吉は顔を真っ赤にして、下に俯く。
ア「木井健先輩ですか？　あの、もし良かったらあそこにあるパソコンの一台を俺たちに譲ってくれませんか？」

「……君、枇榔葵くんだねぇ？　これでも僕、情報通だから色々と知ってるんだよね。君の、秘密も」
ア「……」
「っなーんてね。見た感じ、君が校内で噂になっている”イケメン”という感じがしたから、試してみただけだよぉ」
ソ「ねぇ。ここ押したらどうなるの？」
　爽太はそう言うと、木井健の使っているパソコンの電源ボタンを押した。
「あああぁぁぁ！！！！　サユリィィィィィィン！！！！！！！」
ソ「あ、すいません。ちょっと俺、パソコンの使い方がわからなかったもので……」
「いいのよ爽太。さ、ロボット女も消えたし、話を聞いてもらおうじゃないの」
「わ、わかったよぉ。ここにあるパソコンがほしいんだろ？　やるよやるよぉ。ただし、一つだけ条件がある」
ソ「条件？」
「今、僕たちは色々なゲームを作っているんだ。そこで、君たちに僕が作ったゲームをやってほしい」
「それが条件？」
「いや、そのゲームを今日中にクリアすることが条件だ。なに、簡単なゲームだよぉ。プレイ人数は五人まで。その中の誰か一人が、ゲーム内にある『女神の雫』を入手すれば終了だよ」
――女神（ヴィーナス）の雫（なみだ）。
「これが、ゲームへの入口だよ」
　木井健は、五人分のＵＳＢメモリを藤吉に渡す。
「あ、そうそう。僕たちの学校を出る時間は、十八時だから、それまでにクリアして戻ってきてね」
　現在の時刻は、十六時三十分を過ぎたところだ。
「ちょっと！　あと一時間ほどしかないじゃない？！」
「大丈夫だよぉ。頑張ればすぐに入手できる物だから」

そして俺たちはパソコン部から退室して、四階にある総合実践室へ向かった。
ついこの間までは旧年代のパソコンだったが、今年度からは新しいものになったらしい。
ここに向かう途中で加賀山に経緯を話し、俺たち四人は新型パソコンの電源を立ち上げ、ＵＳＢメモリを差し込んだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9343z/

俺たち、ベーコンレタス部！

2011年12月31日17時47分発行